

フジシール財団 研究助成事業  
成果報告書

公益財団法人フジシール財団  
理事長 岡崎 裕夫 殿

報告日 2025年 4月 18日

研究課題	パッケージデザインが喚起する予期的 UX の分析とそれが製品利用体験全体に与える影響の検討	助成金額
		100 万円
助成名	若手研究助成	
ふりがな	どい としひさ	研究助成申請年度
研究者氏名	土井 俊央	2024 年度
所属機関	大阪公立大学	研究期間
		2024 年 4 月～2025 年 3 月
役 職	講師	

下記の通り、研究成果を報告いたします。

記

1. 研究成果の概要

(研究背景)

パッケージデザインに関する研究では、これまで主にパッケージの色、文字、画像などといった個別のデザイン要素について検討したり、またそれらの要素が消費者にどういった印象や反応、購買意欲へ影響を与えるかを検討したりしたものが多かった。こうした研究はマーケティングや人間工学分野で研究が進められてきたが、製品やサービスの開発において、近年着目されている UX (ユーザエクスペリエンス) の観点からの議論は少ない。

そこで本研究では、魅力的な製品を生み出すために機能性や意匠などを個別に考えるのではなく、ユーザが利用体験 (UX) 全体を通して得る“体験価値”を起点とした UX デザインに着目した。UX デザインのアプローチは、ユーザが製品・サービスを利用する一連の体験全体を利用前 (予期的 UX)、利用直後・利用中 (一時的 UX)、利用度の内省 (エピソード的 UX)、利用体験全体の総合的な回想や振り返り (累積的 UX) といった時間軸でとらえることがある。特にパッケージと UX の関係を考えると、ユーザが製品を利用する前、製品を手にとったときにその製品利用体験の想像やそれに対する製品の期待感を抱く予期的 UX にパッケージデザインが最も大きな影響を及ぼすと考えられる。

(目的)

本研究では、製品の利用前、利用中・利用直後、利用体験の振り返りという一連の製品利用体験全体を考えた時にパッケージデザインがどうあるべきかを検討するために、2種類の調査を実施した。調査1では、パッケージデザインをユーザが見た際に感じる利用体験への期待感や予測といった予期的 UX を定性的に捉えることを目的とした。調査2では、利用前の評価だけでなく、それが実際に製品を利用していく中でどう影響するのかという予期的 UX とその後の体験評価との関係性を明らかにすることを目的とした。

#### (調査1：方法)

まず調査1では、ユーザがパッケージから想起する期待感の評価構造が得られる評価グリッド法を用いて調査した。調査対象製品は、実用的属性製品の代表として日焼け止め、快楽的属性製品の代表としてお菓子の2つの製品とした。日焼け止めについては紫外線防止効果（SPF, PA）が同等のミルクタイプのを20製品、お菓子についてはクッキー等の洋菓子の箱詰めを20製品選定した。このとき、調査参加者が様々な観点から価値評価ができるようにできるだけ偏りのない色や形状等の製品を選んだ。調査参加者は、それぞれ各製品に対して興味のある男女20～27歳の10名(男女同数)ずつとした。

#### (調査1：結果と考察)

評価グリッド法により、各製品群における価値評価構造が得られ、そこから以下のような知見が得られた。

(a) お菓子のパッケージでは、「購入したいと感じる」、「人にあげたい」や「おいしそう」が上位概念として見られ、「高級感がある」、「味の想像ができる」、「わくわくする」などがその要因として見られた。

(b) 日焼け止めのパッケージでは、「日焼け止めとしての効果に期待できる」、「持ち運びしやすい」といった実用的側面が上位概念となっており、「日焼け止めらしさ」、「毎日使用したい」、「人前で使える」などがその要因として見られた。実用的属性が強い日焼け止めの方が、より機能的な項目や使い方に関する項目が多く見られた。

(c) お菓子のパッケージであればどんな味であるか想像できるかということ、日焼け止めであれば日焼け止めの性能・効果に関する概念が見られた。パッケージデザインにおいては、単に意匠的な良さを追求するだけでなく、どんな体験ができるかという予期的UXの観点を考えることの重要性が再確認された。

#### (調査2)

調査2では製品利用前の評価だけでなく、利用前の期待や予測と利用後の体験における評価の関係について調査した。調査対象者に製品を渡し、1週間で製品の開封から利用、消費を行ってもらった。そして、利用前、利用中および利用後の各時点での満足度や印象を問うアンケートを行い、1週間の利用を終えた後にUXカーブを作成してもらった。調査対象製品として、調査1で用いた20製品の中から、比較的魅力があると評価されたものと、あまり評価されなかったものを1つずつ、各製品群で2製品選定した。調査参加者は、各製品群に対し利用経験とアレルギーのない18～27歳の10名とした。

#### (調査2：結果と考察)

(a) お菓子のパッケージでは、UXカーブの結果より、利用前の箱から得る期待感だけでなく、箱を開封したあとのお菓子の個包装も期待感に影響を与えていることが確認できた。個包装にまでイラストがあることや蓋の裏側にもデザインされていること、個包装ひとつひとつのデザインが異なるといった、細部までデザインが考えられていることは高い満足感に繋がっていると思われる。

(b) 日焼け止めのパッケージでは、UXカーブの自由記述欄より、使用前は日焼け止めの中身の効果への期待とともに、パッケージの意匠に対する評価がされていたことから快楽的な側面に対する評価が生じたと考えられる。使用直後には、製品の効果を実感するのに時間をかけながら満足度が上がっていた。また異なる容器の使い方を発見したため満足度が上がったという例も観察された。このように、性能を実感することによる満足度向上もあるが、パッケージそのものに対する利用過程での認識が満足感に大きく影響を及ぼすことも確認できた。

## 2. 研究成果のパッケージ産業への貢献の可能性

本研究で採用した評価グリッド法によって予期的 UX を検討するというアプローチは、デザイン開発実務において予期的 UX を検討する際に活用できるだろう。特に、UX デザイン業務においては予期的 UX の重要性は述べられるものの、その具体的な手法は一般化されているとは言い難い。そうした中で本研究のアプローチは、予期的 UX を検討する際の一つの参考事例となり得るだろう。特にパッケージを対象とした時に、幅広く、かつ解釈可能な予期的 UX が得られることは本研究で対象とした事例を通して示唆された。

またここまで述べたように本研究では、お菓子（快楽的属性の製品）と日焼け止め（実用的属性の製品）の2種類について、期待感や魅力を高めるためのパッケージデザインの知見が得られた。例えば、評価グリッド法から得られた評価構造図を参照することで、下位概念の物理的属性（パッケージデザインの具体的指針）とそれが生み出す期待・予測の関係がわかるので、これらの知見は関連する製品のパッケージデザインにおいて参考になるだろう。特に、お菓子のパッケージにおいては、高級感と親しみやすさの両要素の重要性が大きいこと、食べた時の体験を想像させることが重要であることが示唆された。また日焼け止めのパッケージにおいては、日焼け止めの実用的な品質と高級感を想起させることが重要であることが示唆された。これらの知見は、それぞれの製品群のパッケージデザインの際の一つのデザイン原則となり得る。

また、未だに検討・評価手法が確立されていない予期的 UX についてのユーザの UX 評価メカニズムの調査に貢献できるだろう。こういった予期的 UX を得たらその後の利用体験の満足度は良くなるのかということなど、デザインにおいて予期的 UX を考慮する指針を明らかにすることは意義がある。本研究で述べた、評価グリッド法や UX カーブによる予期的 UX やその後の利用体験の調査は質的なアプローチから、どんなパッケージデザインであれば、どんな予期的 UX が得られるのか、その後の体験との関係はどうかという仮説を得ることができる。こうした仮説に基づいて、予期的 UX と製品デザインの関係を検証していくことで、予期的 UX に関わるユーザの UX 評価メカニズムへの理解が深まるだろう。

3. 学会発表、学会誌等への論文掲載、産業財産権出願などの実績（現時点で未発表・未掲載・未出願のため、上記「1. 研究成果の概要」、「2. 研究成果のパッケージ産業への貢献の可能性」の当財団ホームページ上の公開の延期を希望される場合、その旨 記載してください。）

Doi, T., Nagata, A. (2025) An Analysis Method of Anticipated UX Evoked by Packaging Design Using the Evaluation Grid Method: A Case of the Analysis of Packages of Boxed Flour Confections and Sunscreen, *Applied Sciences*, 15(3), 1339.

永田蒼衣, 土井俊央. (2025. 2) パッケージから得られる期待感の分析とそれがその後の体験の評価に与える影響, 2024 年度日本デザイン学会第4支部大会, 京都女子大学.

永田蒼衣, 土井俊央. (2024. 11) パッケージデザインが喚起する予期的 UX の分析, 2024 年度日本人間工学会関西支部大会, 摂南大学.